

表現力を育む保育実践

○岡本京子

(神石高原町立 こばたけ保育所)

玉木健弘

(武庫川女子大学)

問題

保育所保育指針(2018)の感性と表現に関する領域「表現」には、「様々な出来事の中で、感動したことを伝えあう楽しさを味わう」とある。このことは子どもが様々なことに出会い、心を動かされる体験をする子どもはそのことを伝えたいと思うようになる。4歳児は、自分の思いを他者に伝える事ができるようになっていくが、自分以外の他者の思いを理解することは難しい場合も多い。

そこで本研究では、子ども一人ひとりの表現力を育み、自分の思いだけでなく、他児の考えや気持ちを理解できるような保育実践を行った。

方法

調査対象児：公立保育所に通所する4歳児8名(男子3名、女子5名)を対象に研究を実施した。

保育実践のクラスについて：1対1であれば自分の考えを伝えることは出来る子どもは多い。一方で、クラスの他児の前では、自分の考えを伝える事が難しい子もいる。そのため、他児の考えを理解する事ができないまま話をするため、話がまとまらない事が多く、他児の考えに気づかずに話をする場面も見られる。

質問紙：子どもの発達程度などを調べるため、KIDSとS-M社会生活能力検査第3版を実施した。

保育実践：本研究は、子どもが主体となって活動し、子ども同士が対話をしやすい内容とした。上記の内容を含んだ保育はいくつかあるが、今回は、自分と他児との違いや他児と対話をしやすく、考えを自由に表現できる「製作」を用いて保育実践を行った。

この実践は、様々な廃材を利用し、子ども自身が使用したい材料を選ぶことで、人とは違う自分なりの考えを表現して、他児に自分の気持ちを伝えることができるようにした。

保育実践での保育者の関わりと保育での工夫：保育者は、活動時の子どもたちの様子を見守りながら、個々に合わせた声かけを行った。保育での工夫として、子どもたちが落ち着いて話を聞けるように導入遊びを行った。

また、×印を付けたマスクを用意し、話をしている時といけない時を言葉だけの指示だけでなく、目で見ても理解しやすいようにした。

実施時期：X年9月に実施した。

実践の中で予想される子どもの行動変化：①話ができ

る→②自分の考えが他児に伝わる→③自分と他児との違いや類似点を感じる→④自分だけでなく他児について考えるきっかけになる→⑤他児を理解するために話をする(コミュニケーションの成立)。

結果および考察

対象クラス児の発達および社会生活能力について：まず、子どもの発達の程度を測定するためにKIDS(タイプC)を実施した。KIDSの結果、総合発達指数は84から114の値を示した。次に、S-M社会生活能力検査第3版を実施した。その結果、48から100の値を示した。

発達検査ではクラス内の子どもに大きな差異は見られなかった。一方で、社会生活能力検査では、クラスの子どもの間で違いがあることが示された。これは、大まかな部分では子ども同士の違いが認められない場合でも、細かい部分では、違いがあることが示唆された。このことから、集団での保育では、表面的に観察される部分だけでなく、子どもの具体的な行動を観察する事が重要だと考えられる。

保育実践について：子どもたちが作成しやすいように「夏の虫作り」をテーマに保育実践を行った。作成する中で、自分が作成したいものをすぐに決定できる子どもとすぐに作成するものを決めず、少し時間をかけて作成するものを決定する子ども見られた。この違いについて、質問紙調査と併せて検討した結果、DQが100の値を超える子どもは、比較的早く作成するものを決定していることが認められた。

作成後に、子どもに感想を聞いた結果、自分の作品についての話を他児に聞いてほしいという様子が見られた。また、他児に話をする中で、「聞いてもらえた」という気持ちになり、うれしそうな表情が観察された。さらに、自分の作品について、自分では気づかなかった部分を他児から指摘されることで、自分の考えていることと他児が考えている事が違うということを感じた子どももいた。

今回の実践では、「実践の中で予想される子どもの行動変化」での予想とほぼ同様の行動が観察された。このことから、自分なりの表現力を育成することで、子どもが変化する事が示唆された。しかし、他児が話をしている時に、話が聞けない子どももいた。今後は、子ども一人ひとりの表現力を高めながら、他児に対する関わり方を学べる保育を実践していくことが必要だと考えられる。